原遺跡第5次調査の概要

岩沼市教育委員会

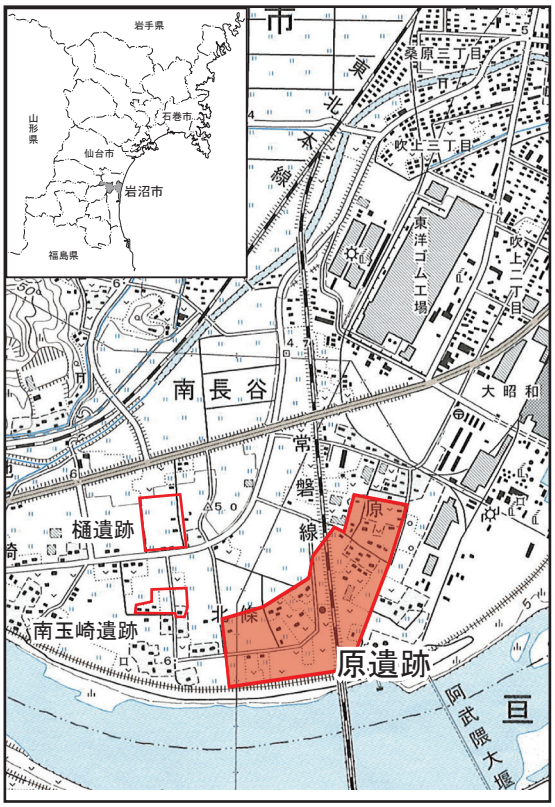
１．調査要項

所在地　　岩沼市南長谷字北上・上原地内
調査原因　重要遺跡範囲内容確認調査
調査指導　原遺跡調査検討委員会
調査期間　令和２年７月 16 日～ 11 月 30 日
調査面積　Ⅰ区（第 16 地点）538 ㎡
　　Ⅱ区（第 17 地点）366 ㎡　計 904 ㎡
調査主体　岩沼市教育委員会（生涯学習課）
調査協力　宮城県教育委員会
　　多賀城跡調査研究所

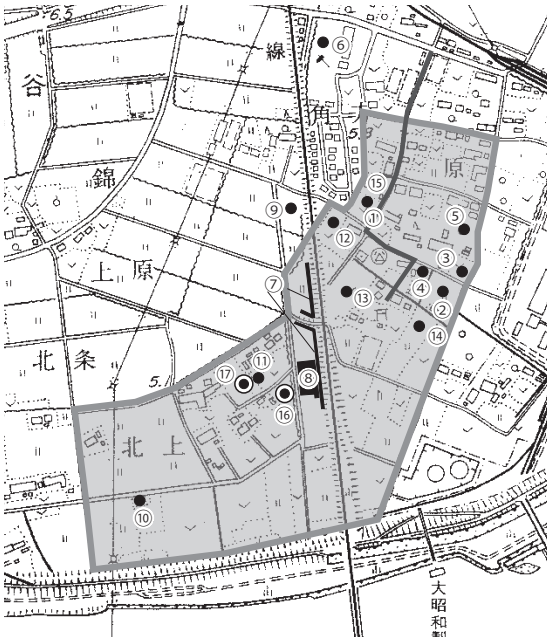
２．遺跡の位置と歴史環境

原遺跡はＪＲ岩沼駅の南方約 3.2 ㎞に位置し、岩沼市南長谷字原・上原地内に所在する。遺跡範囲の中央にはＪＲ常磐線が南北に通過しているが、常磐線を挟んだ東西の標高は５ｍ前後と大差がなく、阿武隈川左岸に形成された南西－北東方向にのびる自然堤防上で遺跡が営まれている。この地域は『和名類聚抄』の記載にある陸奥国名取郡玉前郷に含まれると考えられ、10 世紀頃に成立したと考えられている『延喜式』の東山道陸奥国に設置された駅家である玉前駅家、さらに多賀城跡より出土した９世紀代と推定されている木簡にみえる「玉前剡」もこの地域内に存在が比定されてきた。

平成 16 年に発見された原遺跡では、これまでに 17 地点で調査が実施されている。圃場整備事業に伴って実施された平成 28 年度の調査（第２図⑦）では、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴、竪穴建物、溝、土坑などの遺構、６世紀後半～９世紀後半にかけての遺物を多数発見している。中でも７世紀末葉頃に美濃須衛窯跡



第１図　原遺跡と周辺の遺跡



第２図　原遺跡内の調査地点

群で作られたと考えられる須恵器圏足円面硯の出土は、この時期に文字を扱うことが可能な人物が当地に所在していたことを示すこととなり、遺跡内に官衙的な施設が設置されていた可能性を強く示すものとなった。さらに平成29・30年度に実施した第２・３次調査（第２図⑧）では、大別して３時期の遺構群が発見され、８世紀前半から後半の時期であるⅡ期の遺構群では、桁行10間（約20ｍ）、梁行３間（約７ｍ）を数える長大な掘立柱建物であるSB01とSB02が発見されたことで注目を集めたほか、８世紀前半以前の遺構群としたⅠ期には、SA01材木塀とこれに並行するSD11大溝が存在することを確認している。令和元年度には第12地点（第２図⑫）で幅5.5ｍ以上の大溝や竪穴建物、第４次調査（第２図⑬）では８～９世紀代の掘立柱建物群や６世紀後半～９世紀前半にかけてつくられた竪穴建物などが発見されている。

３．第５次調査（第16・17地点）の調査成果概要

第５次調査では、古代の掘立柱建物跡５棟、竪穴建物跡15軒、井戸跡２基、大型土坑４基、溝跡６条などの遺構が発見されている。

【掘立柱建物跡】

掘立柱建物跡は、Ⅰ区でSB01が１棟、Ⅱ区でSB02～06の４棟が確認されている。

SB01は桁行４間（8.04ｍ）、梁行３間（5.24ｍ）の南北棟である。建物主軸方位は東列で計測すると、真北から３°西へ傾く。柱穴掘方の平面形は長軸84～167㎝、短軸60～126㎝を測る長方形であるが、掘り下げを行った10穴のうちで段掘りが行われているものが６穴ある。これらの柱穴で深く掘り下げているのは、いずれも建物側である。柱穴の大半は桁行・梁行に対して直交して掘られるが、四隅の柱穴は長辺が建物に対して45°ほど傾くものと、短辺が45°ほど傾くものの２者がある。柱痕跡はすべての柱穴で認められ、柱筋のとおりは概ね良好である。確認した柱痕跡は22～26㎝ほどの円形である。なお、南西隅の柱穴掘方内には柱痕跡が２つ確認されており、１つは床束の可能性が考えられる。出土した遺物の年代観や重複する遺構との関係から８世紀中～後半に機能していたとみられる。

Ⅱ区で確認した掘立柱建物跡については全容が把握できるものがない。しかしながら、真北から４～８°西へ傾くSB02～04と、41～47°西へ傾くSB05・06の２者があり、前者はSB01と同時期に機能していたと考えられる。またSB05・06については、７世紀後半の年代観が考えられるSI19などの主軸が、真北から40°ほど西に傾くことから、同様の時期に存在していたとみられる。

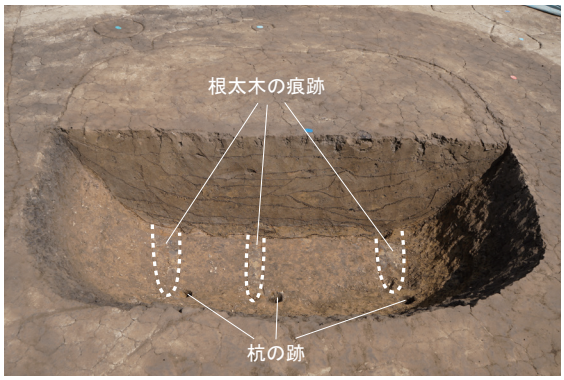
【竪穴建物跡】

竪穴建物跡は、Ⅰ区で11棟、Ⅱ区で４棟確認されている。ここでは時期ごとの竪穴建物について様相を述べる。

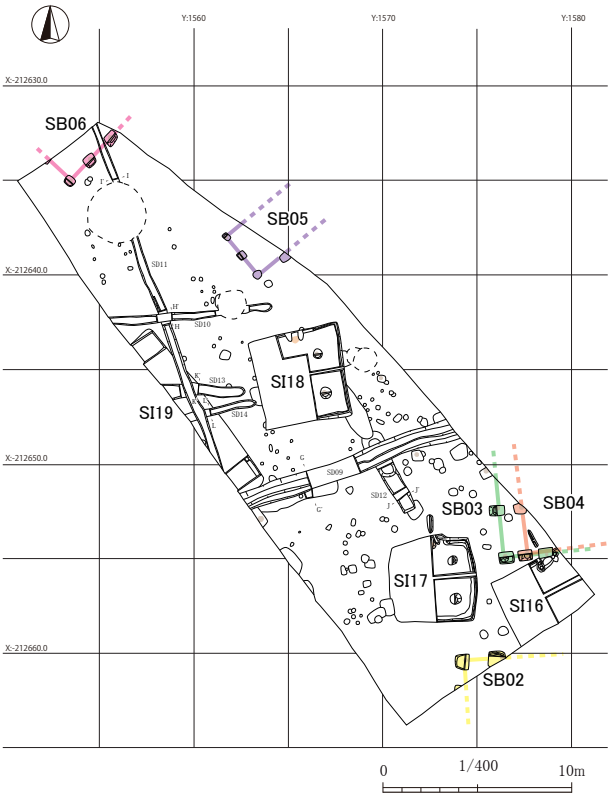
今回の調査で最も古い時期の竪穴建物はⅠ区南部で確認された６世紀前半頃のSI15である。この竪穴建物の覆土は砂質シルトであるが、同様の遺構堆積土はこれまで第１・３次で発見された大溝と材木塀があり、これまで年代が不明であった両者の時期を推量する上で一つの指標となりうる。

第3図　第５次調査Ⅰ区全体図　1・400

SB01 掘立柱建物跡（北から）



SK01 大型土坑（南から）



第4図　第５次調査Ⅱ区全体図　1・400

SI16 竪穴建物跡カマド付近の状況（南から）

SI17 竪穴建物跡から出土した猿投産の製品

６世紀末葉～７世紀前半の時期の竪穴建物はⅠ区 SI01・02・04・07・13 がある。ほぼ全容が明らかな SI01・02・04・07 をみると、いずれも一辺が約 5.5 ～ 6.1m の方形とみられ、北壁中央部にカマドを有している。また SI01・02 のカマド燃焼部中央には土製支脚がみられる。煙道は燃焼部奥壁から１m 以上の長さを有する長煙道である。SI02 のみ燃焼部の奥壁が建物壁面を若干掘り込んでいるが、それ以外は建物壁面が燃焼部奥壁を兼ねている。なお、SI02 ではカマド前面の床面上から土師器椀・甑・甕がまとまって出土している。

７世紀後半～８世紀初頭の時期の竪穴建物はⅡ区 SI16 ～ 19 がある。全容が分かる SI17・18 をみると、一辺が約 4.4 ～ 4.8m の方形とみられ、北壁中央部にカマドを有している。カマド本体では SI16 が特筆される。このカマドでは左袖に芯材とオサエ材として２個体の土師器甕を逆位で設置していた。また、カマド右脇には底部を欠いた土師器甕を正位で設置していたほか、その傍らには土師器甕片に白色粘土塊を載せた状態のものも確認されている。遺物では SI16 床面から湖西窯跡群で生産された須恵器フラスコ形長頸瓶が、SI17 床面からは猿投窯跡群で生産された須恵器フラスコ形長頸瓶が発見されている。なお、今回の調査では部分的な確認にとどまっているが、SI19 は一辺が 10 ｍを超える竪穴建物である可能性が考えられる。

８世紀前半～後半についての竪穴建物は本調査区内では確認されていない。その後に竪穴建物が認められるのは８世紀末葉以降となる。８世紀末葉～９世紀初頭の時期の竪穴建物は SI09・11 があり、９世紀前半の時期の竪穴建物は SI10 があるが、いずれもⅠ区に存在する。これらは一辺が約 2.8 ～ 3.9m の方形であり、カマドは東壁中央に設置されるもの（SI09・11）と、北壁東寄りに設置されるもの（SI10）がある。なお、SI10 のカマドは燃焼部奥壁を大きくＵ字状に掘り込んでいる。

【大型土坑】

今回の調査で発見された注目すべき遺構としては、７世紀末葉～８世紀後半にかけてつくられたとみられる SK01・SK02・SK05・SK09 の４基の大型土坑が挙げられる。これらの土坑はⅠ区北東部の約 140 ㎡内という限られた面積の中で集中して存在している。ここでは最も特徴的な遺構である SK01 について述べる。

SK01 の平面形状は隅丸方形で、規模は長軸 3.32 ｍ、短軸 3.20 ｍを測る。断面形状は逆台形であり、確認面からの深さは 90 ㎝を測る。底面には褐色粘土を用いた貼床がみられ、そこでは床板を設置するために根太木を並べた荷重痕跡とみられる幅 10 ～ 15 ㎝のにぶい黄橙色粘土が東西方向に３列認められている。各根太木痕跡の先端には杭が打ち込まれていることから、壁板の設置、あるいは遺構の上部を覆うような簡易的な屋根のような設備が伴っていた可能性がある。このような特徴から、本遺構については温度や湿度などの配慮が若干必要となるような物資の貯蔵施設として利用されていた可能性が考えられる。

【井戸跡】

井戸跡は今回の調査でⅠ区から２基発見されている。いずれも素掘りであり、９世紀前半の時期とみられる。SE01 は SI11 と完全に重複していることから、建物が廃絶してからすぐに井戸を掘削した可能性が考えられる。SE01 の上部の掘方は直径 2.5 ｍの円形であるが、内部の

掘方は方形を呈する。確認面からの深さは1.7ｍを測る。SE02の上部の掘方は直径2.3ｍの円形であり、確認面からの深さは1.3ｍを測る。なお、いずれの井戸も素掘りである。

【溝跡】

Ⅰ区西部で南北に延びるSD01、Ⅰ区北東隅部で東西に延びるSD07は、いずれも規模や断面形状から一連の遺構であるとみられる。これらの溝の特徴としては、底面に溝を掘った時の痕跡である凹凸が遺されていることが挙げられる。第１・３次調査でもSD07に接続すると考えられる東西溝を発見しており、土地の区画を目的としてつくられたと考えられる。SD01からは「土」と記された墨書須恵器坏が出土しており、その年代観から９世紀後半以前に機能していたとみられる。

４．まとめ

【調査で確認された各時期別の様相】

第５次調査では大別するとⅠ期・６世紀前葉～８世紀初頭、Ⅱ期・８世紀前葉～後葉、Ⅲ期・８世紀末葉～９世紀後葉頃と、３時期の遺構群が確認された。

各時期の遺構の構成を概観すると、Ⅰ期は大型の竪穴建物群と掘立柱建物２棟で構成されている。特に今回のⅠ区の調査では６世紀末葉～７世紀前半の竪穴建物群が多く確認できたことから、当該期の集落の中核的な場であった可能性が考えられ、同様に７世紀後半～８世紀初頭については一辺が10ｍを超える建物が発見されたⅡ区周辺へ中心が移ったとも考えられる。Ⅱ期はSB01掘立柱建物とSK01・02・05の大型土坑などで構成されており、竪穴建物は見られない。SB01は第３次調査で確認された大型掘立柱建物と同様に真北方向を強く意識してつくられ、またⅡ区でも部分的な確認ではあるが、SB02～04もほぼ真北方向を意識したとみられることから、８世紀代の官衙的な遺構の中枢は調査区周辺に存在していた可能性が高い。Ⅲ期は小規模な竪穴建物群と区画溝、井戸などで構成され、官衙的な遺構群が本調査地から移動した後の姿を示している。

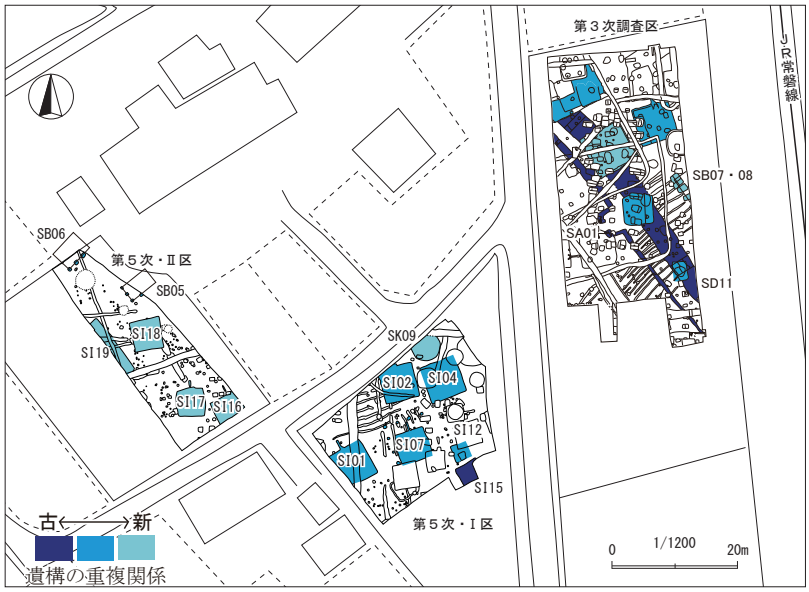
【調査区周辺の土地利用変遷】

隣接する第３次調査での成果、ならびに出土遺物の検討も踏まえると、現時点では以下のような各期ごとの土地利用変遷が推量できる。

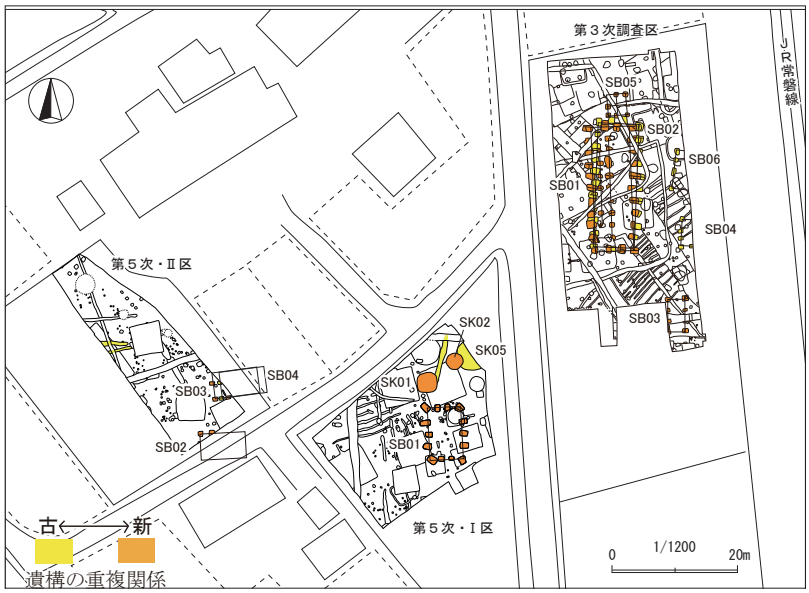
Ⅰ期：古墳時代後期から終末期にかけて拠点的な集落として機能していた本調査地周辺が、７世紀後半頃から遠隔地からの物資を入手しうる人々も居住するようになり、あわせて官衙的な遺構群が展開するようになる（第５図）。

Ⅱ期：８世紀前半から後半にかけては真北方向を強く指向する官衙的な遺構群の中心的な場となった結果、集落はこの地から姿を消す（第６図）。

Ⅲ期：８世紀後半以降に官衙的な施設が調査地周辺から北東部へ移動し、再び集落が営まれ、９世紀後半頃まで存続する（第７図）。



第5図　Ⅰ期遺構群



第6図　Ⅱ期遺構群

第7図　Ⅲ期遺構群